

大学院生プロジェクト型研究・研究成果報告書

研究代表者：亀岡 晃佑（臨床心理学コース）

■ 研究題目
怒りに関連する慢性的ストレス反応尺度作成の試み —日韓比較による検討—
■ 研究代表者・分担者（氏名、コース）
亀岡 晃佑（臨床心理学コース・博士課程後期1年）（代表者） 宮川 紫苑（臨床心理学コース・博士課程後期2年）
■ 研究成果概要（目的、実施内容、結果、今後の課題など）
<p style="text-align: center;">問題</p> <p>長期間にわたり持続する慢性的ストレス（Chronic Stress）によるストレス反応についての研究はいまだ乏しい。慢性的なストレスによって引き起こされる病態として、火病がある。火病（Hwa-byung, HB）とは、主に韓国人にみられる文化結合症候群であり、怒りや不満などの否定的感情が蓄積して発生する病気である（澤野, 2012）。身体的・感情的・認知的な症状を特徴とし、慢性的なストレスや抑圧された怒りと関連していることが多く、一般的な症状としては、動悸や胸の圧迫感や頭痛や怒りなどがある（Kwon et al., 2020）。池田・奥野（2007）は先行研究を概観したうえで、文化結合症候群を固有の文化における（特に西洋の視点からの）非典型的な反応としてまとめている。</p> <p>しかし、慢性的なストレスに晒される環境や、怒りや不満をためるような様式のコミュニケーションは韓国の文化に固有の現象とは限らないのではないか。例として、宗像他（1985）は、日本における自律神経失調症、神経症（不安症、恐怖症、抑うつなど）を生む重大な背景として、慢性のストレス源であるイライラ、不満、悩みなどの種である日常苛立ち事があるとした。また、李（2006）は日韓の不満表明に関する比較を言語表現の分析によって行い、日本語母語話者が韓国母語話者に比べて「不満を表明しない」「遠回しな不満表明」を使用する傾向にあることを明らかにした。また、我慢を美德ととらえられやすい（本田, 2013）文</p>

化的背景の存在も否定できない。慢性的なストレスに晒されることや、怒りや不満をためることによる病理が韓国のみ現象であるという論理については再考の余地があると考えられる。また日本においては、長時間労働が美德であるという価値観（小野塚，2018）や、勤勉かつ真面目であることが美德であるという文化が根強い（大内，2016）。このような点からも、日本人において個人の自由な生き方よりも、実直に社会に対して労働力を提供することが求められているといえる。このような社会においても、慢性的なストレス下における身体的、心理的症状が現れることは想像に難くなく、また、自らの不満や意見を発信する機会が阻害されてしまい、怒りや不満をためるようなコミュニケーションも蔓延するのではないかと考える。日本固有の文化に依存した文化結合症候群として、森田（1974）による対人恐怖症がある。金（2005）は対人不安が日本文化を反映した日本人の特徴であるという意見に疑問を呈し、同じ東洋文化である韓国人に対する調査から、対人不安に関する心理構造では日韓で共通していることを明らかにした。火病の発症メカニズムについても同様に、発症頻度や重症度に差はあれど、共通する心理構造が想定される。

目的

火病の特性および症状を測定する尺度の日本語版を作成し、既存尺度（Kwon et al., 2008）の理論的枠組みに基づく妥当性・信頼性の検討を行い、慢性的ストレスと関連が想定されるコーピングについて探索的に検討を行う。

方法

調査対象者

日本国内では、クラウドソーシングサービス（株式会社クラウドワークス）を通じて日本人 259 名が回答し、そのうち 102 名が再検査信頼性の検証のため二回目調査に回答した。一回目調査では不良回答検出項目回答者を除く 252 名（男性 121 名，女性 131 名，平均年齢 42.80 ($SD = 9.46$))，二回目調査では一回目回答と照合できた 81 名を分析対象とした。韓国国内では、クラウドソーシングサービス（株式会社 Embrain）を通じて韓国人 271 名が回答した。そのうち、不良回答検出項目回答者および調査会社の登録情報と異なる性別・年齢の回答者を除く 250 名（男性 100 名，女性 149 名，その他 1 名，平均年齢 43.67 ($SD = 11.42$)) を分析対象とした。

質問紙（日本）

フェイスシート：調査への同意の有無，性別，年齢の記入を求め，回答を必須設

定にした。

日本語版火病 (hwa-byung) 尺度 (Table1) : Kwon et al. (2008) の Hwa-Byung Symptom Scale を用いて、原著者の承諾を得たうえで原版から日本語へ順翻訳を行った。その後、順翻訳版を原版の言語に逆翻訳、項目を調整した。火病患者の特性を有する傾向を測定する火病性格と、慢性的な怒りや不満の抑圧による慢性的ストレス反応である火病症状の二つからなる。

感情抑制傾向尺度：外的基準の証拠の検証および慢性的ストレス反応との関連の探索的検討のため、樫村・岩満 (2007) による感情抑制傾向尺度における怒り因子の項目を使用した。

自己表現尺度：外的側面の証拠の検証および慢性的ストレス反応との関連の探索的検討のため、内山 (2020) による自己表現尺度における非主張的表現因子の項目を使用した。

不機嫌・怒り：外的側面の証拠の検証のため、鈴木他 (1997) による心理的ストレス反応における不機嫌・怒り因子の項目を使用した。

日本語版 Brief COPE：リスク要因の探索的な検討のため、大塚 (2008) による日本語版 Brief COPE を使用した。アルコール、薬物使用の項目は日本語版著者および原著者(Carver, 1997)の代理人の許可を得て一部改変した。

不良回答者の検出：IMC 課題 (増田他, 2019)

質問紙 (韓国)

フェイスシート：調査への同意の有無、性別、年齢の記入を求め、回答を必須設定にした。

火病尺度：Kwon et al. (2008) の Hwa-Byung Scale を使用した。

韓国語版 Brief COPE：Kim & Seidlitz (2002) による韓国版 Brief COPE を使用した。薬物使用の項目は原著者(Carver, 1997)の代理人である韓国語版著者の許可を得て一部改変した。

不良回答の検出：指示応答項目 (지시 응답 문항)。指示した選択肢に回答しなかった回答者のデータを分析から除外するため使用した。

分析手続き

記述統計量の算出、妥当性検討のためおよびコーピングとの相関分析を行った。また、火病尺度について内的一貫性および再検査信頼性を算出した。

倫理的配慮

東北大学大学院教育学研究科研究倫理審査委員会の承認を受けた (ID :

25-1-084)。Web上の質問紙の冒頭に、回答は任意であり無記名式であること、回答を拒否したり中止したりしてもいかなる不利益も被らないことを明記した。

Table1 作成項目

火病性格

私は多くのことを諦めて生きている。
周囲の人々は、私の感じていることに気づかないことが多い。
私は悪い感情を心の中に長くため込むほうだ。
私は気分を害しても、よく表に出さない。
私は爆発するまで愚直に我慢するほうだ。
他人をととても苦手に思う。
私から先に人に声をかけるのは難しい。
私は言いたいことを他人に言えない。
私はどこかへ行くとき、いつも同じ道を選ぶ。
私は遊びに行くとき、以前に行って楽しかった場所へ再び行く。
私はできるだけそのことを忘れようと努める。
私は問題状況について、できるだけ考えないようにする。
私は自分の立場をあきらめて相手の立場に従う。
私は相手の意見に合わせようと努力する。
私は問題があるとき、それを運命として受け入れる。
私は罪悪感を抱くことが多い。

火病症状

私の人生は不幸なほうだ。
私は恨めしく思うときがある。
自分の人生がもの悲しいと感じる。
悲しみを感じる。
悔しいと感じる。
神経がとても弱って、心を保てない。
手足が震えて、じっとしてられない。
自分自身に失望することが多い。
顔がほてることがよくある。
胸の中に熱がこもっているとよく感じる。
下（脚や腹）から上（胸）へこみ上げてくるものをよく感じる。
怒ると手がしびれたり震えたりする。
消化が悪く、胃もたれしやすい。
ひどく疲れている。
世の中が不公平だと感じる。

結果

記述統計量

日韓の火病尺度および妥当性検討に使用した尺度の記述統計量を算出した (Table2)。

Table2 記述統計量

	range	M(SD)	
		日本 (N = 252)	韓国 (N = 250)
火病性格	0-4	2.20 (0.56)	2.03 (0.53)
火病症状	0-4	1.59 (0.82)	1.51 (0.85)
感情抑制傾向	1-4	2.72 (0.64)	
非主張的表現	1-5	3.07 (0.79)	
不機嫌・怒り	0-3	0.91 (0.77)	

日本語版尺度の妥当性 (外的側面の証拠)

作成尺度の外的側面の証拠を検討するため、理論的に関連が想定される尺度間の相関係数を算出した (Table3)。その結果、火病性格と感情抑制傾向、非主張的表現、不機嫌・怒りとの間には有意な正の相関が示された (順に、 $r = .49$, $r = .45$, $r = .30$, 全て $p < .001$)。また、火病症状と非主張的表現、不機嫌・怒りとの間には有意な正の相関が示された (順に、 $r = .45$, $r = .30$, 全て $p < .001$) 一方で、感情抑制傾向との間には有意な相関が認められなかった ($r = .02$, ns)。

Table3 妥当性 (外的側面の証拠) の検討に関する相関係数

	火病性格	火病症状
火病性格		
火病症状	.51 ***	
感情抑制傾向	.49 ***	.02
非主張的表現	.45 ***	.22 ***
不機嫌・怒り	.30 ***	.66 ***

*** $p < .001$

日本語版尺度の信頼性

内的一貫性検討のため α 係数の算出を行った結果、火病性格は $\alpha = .77$, 火病症

状は $\alpha = .93$ と一定程度の値を示した。

再検査信頼性を検討するため、2週間間隔で同一対象者に再測定を行い、級内相関係数 (ICC) を算出した。その結果、火病性格は $ICC = .78$ (95% CI [.68, .81]) で火病症状は $ICC = .84$ (95% CI [.76, .87]) であり、良好な再検査信頼性が確認された ($n = 81$)。

コーピングとの関連

Brief COPE を用い、コーピング方略と火病性格および火病症状との関連を探索的に検討した。各変数間の関連は Table4 の通りである。

Table4 火病とコーピングの相関分析

	日本		韓国	
	火病性格	火病症状	火病性格	火病症状
気晴らし	.07	-.05	.17 **	.23 ***
積極的コーピング	-.27 ***	-.25 ***	-.05	-.07
否認	.19 **	.26 ***	.30 ***	.32 ***
物質使用	.10	.17 **	.20 **	.26 ***
情緒的サポート	-.13 *	-.08	.05	.03
道具的サポート	-.19 **	-.20 **	.05	.01
行動的諦め	.41 ***	.30 ***	.54 ***	.61 ***
感情表出	-.17 **	.09	.08	.27 ***
肯定的再解釈	-.22 ***	-.36 ***	-.20 **	-.23 ***
計画	-.22 **	-.15 *	.01	.05
ユーモア	-.15 *	-.15 *	.12 †	.15 *
受容	-.10	-.31 ***	-.08	-.06
宗教・信仰	.05	.15 *	.11 †	.13 *
自己非難	.43 ***	.60 ***	.54 ***	.68 ***

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

考察

日本語尺度と関連が想定される尺度との相関分析において火病症状と感情抑制傾向を除き有意な正の相関が示されたことから、火病の各構成概念に関する妥当性が一定程度確認されたと考えられる。一方で、火病症状と感情抑制傾向は無相関であった。火病症状は、抑えたくても抑えられない怒りに関する種々の症状であり、抑制傾向は火病症状に時間的に先行し併存しにくい概念であることが考えられる。また、内的一貫性および再検査信頼性の観点から、一定程度の信頼性が確認された。この点において、日本でも火病に関連する心理的特徴が観察される可能性が示唆されたと考える。

また、ストレス反応と関連が想定されるコーピングについて探索的に関連を検討した結果、日本では積極的コーピング、道具的サポート、計画、ユーモア、受容で韓国ではみられなかった有意な負の関連がみられた。一方で韓国では、気晴らし、感情表出、ユーモアにおいて日本ではみられなかった有意な正の関連がみられた。この点、日本において火病症状に効果的に働くコーピングが多様に存在し、韓国においては気晴らしや感情の表出による対処方略を多く使用することと怒りと関連する慢性的なストレス反応の頻度と関連している可能性が考えられる。

今後は火病性格および火病症状それぞれの下位構造にも着目し、得点の比較等を通して日韓それぞれにおける火病を取り巻く特性・行動・症状に関する示唆を得る。

引用文献

- Carver, C. S. (1997). You want to measure coping but your protocol's too long: Consider the Brief COPE. *International Journal of Behavioral Medicine*, 4, 92-100.
- 本田 康二郎 (2013). 我慢と無責任 戦後日本の社会規範と福島原発事故 金沢医科大学教養論文集, 41, 25-46.
- 池田 光穂・奥野 克己 (2007). 医療人類学のレッスン 学陽書房
- 樫村 正美・岩満 優美 (2007). 感情抑制傾向尺度の作成の試み— 尺度の開発と信頼性・妥当性の検討— 健康心理学研究, 20(2), 30-41.
- 金 美伶 (2005). 韓国と日本の大学生における対人不安と同一性、公的自己意識、相互依存的自己との関係 パーソナリティ研究, 14(1), 42-53.
- Kim, Y., & Seidlitz, L. (2002). Spirituality moderates the effect of stress. *Personality and Individual Differences*, 32(8), 1377-1390.

- Kwon, J.H.; Park, D.G.; Kim, J.W.; Lee, M.S.; Min, S.G.; Kwon, H.I. (2008). Development and validation of the Hwa-Byung Scale. *Korean Journal of Clinical Psychology*, 27(1), 237-252.
- Kwon, C.Y.; Chung, S.Y.; Kim, J.W. (2020). Hwabyung: A Mental Disorder Related to Suppressed Emotions and Somatic Symptoms Reminiscent of Being on Fire. *Psychosom. Med.*, 82, 529-531.
- 李 善姫 (2006). 日韓の「不満表明」に関する一考察—日本人学生と韓国学生との比較を通して— 社会言語科学, 8(2), 53-64.
- 増田 真也・坂上 貴之・森井 真広 (2019). 調査回答の質の向上のための方法の比較 心理学研究, 90(5), 463-472.
- 森田 正馬 (1974). 森田正馬全集 第三巻 白揚社
- 宗像 恒次・仲尾 唯治・藤田 和夫・諏訪 茂樹 (1985). 都市住民のストレスと精神健康度 国立精神衛生研究所紀要, 32, 49-68.
- 小野塚 知二 (2018). 労働リテラシー教育という可能性 社会政策学会誌, 10(1), 1-3.
- 大塚 泰正 (2008). 理論的作成方法によるコーピング尺度: COPE 広島大学心理学研究, (8), 121-128.
- 大内 伸哉 (2016). 勤勉は美德か? 幸福に働き, 生きるヒント 光文社新書
- 澤野 美智子 (2012). ケアの再構成を通じた韓国の家族再考: 既婚女性の乳がん患者の事例 文化人類学, 77(4), 588-598.
- 鈴木 伸一・嶋田 洋徳・三浦 正江・片柳 弘司・右馬埜 力也・坂野 雄二 (1997). 新しい心理的ストレス反応尺度 (SRS-18) の開発と信頼性・妥当性の検討 行動医学研究, 4(1), 22-29.
- 内山 有美 (2020). 自己表現尺度の作成および信頼性と妥当性の検討 パーソナリティ研究, 28(3), 247-249.